

山と電気の風景論 ⑰

白山、荒島岳～石川・福井の霊峰～

セリングビジョン(株) 代表取締役 岡部 秀也

8月は年間で最も登山者が多い「山の日」の登山日和である。読者も暑さや雷雨等の天候急変に留意して有意義な安全登山を心がけてほしい。さて本号では、今年6月に登攀した、「熱中症に留意して大パノラマを味わった荒島岳」と、逆に翌日「残雪熊遭遇で冷やっとした白山」を特筆したい。

海側には原子力などのエネルギー源

両座の位置する福井県、石川県の「海側」といえば、電力関係では原子力再稼働の動向がいつも気にかかる。原子力立地県であり電気事業と深く関わりのある県であるためだ。安全確認ができた原子力は、夏場の安定供給や料金の低減のため速やかに再稼働してほしいと今回、日本三霊山の白山神社に願ってきた。

今回は東京から、北陸新幹線で金沢まで行き、現地レンタカーを利用した。学生時代からの岳友の島矢さんと登攀したが、新幹線の開業効果で東京からビジネスでも観光でもアクセスしやすくなったことを実感した。

以下は、両県の「山側」で登山口へのドライブ視察を味わいつつ、両山を登ったヤマレコである。

山側は、霊山と信仰登山。二人の老師

日本の三大霊山は、富士山、立山そして、白山である。今回の白山登山で三霊山登頂をようやく達成できた。しかし、地元の方々、白山を自分の家の庭のように何回も季節ごとに登っている。今回も登山者に会うごとに、「今回は何回目…」「冬に来て、春に来て、今回そして秋にも来る」という「信仰家、修験者」もいた。それだけ、地元では日常生活の中に白山や荒島岳が存在していると感じた。

両座を登るにあたり、地元出身で「百名山」を著し登山の楽しさ、意義を広めた深田久弥氏、そして善の思想を世界に広めた国際的仏教学者鈴木大拙先生の本を改めて読んだ。深田氏は、白山には中学生の頃から何回も登っており、白山を最も印象的で懐かしい信仰の山と形容している。今の百名山登山のブームに火をつけた登山家でありジャーナリストである。一方、鈴木老師は、山岳信仰の原点の当地に育ち、無心、平常心の重要性を説かれ、欲にとらわ

れることのない自由な心の境地のありがたさを教えてくれる。季節は、つねに移ろい、変化する自然界のサイクルにあって、その時間の流れに身を委ねて、ひたすら山を登り、リフレッシュするのもたまにはいいだろう。多忙、多用な電力ビジネススタッフも時々、自然のなかで心身を鍛えると、鈴木老師の言われる無心が保てるかも知れないと思った。

今回の両座の登山では、「百の頂きには百の喜びがあり、百人あれば楽しみ方も百様」（深田久弥）であり、焦らず無心でマイペース登山することに心がけた。

荒島岳 1524m (平成 29年 6月 17日)

往復6時間26分(休憩含む)、標高差1259m。荒島岳は意外に足場がきつかった。荒れた岩肌もあり、でこぼこ道もあり、急登もあり、しかも炎天下だったため熱中症に注意した。最初の勝原スキー場から炎天下の舗装林道、低草ジグザグ土道で40分ほど登山口まで歩き、体力が消耗した。しかし登山口からはブナ林を森林浴でき、トトロの木々で休み、白山ベンチで雪渓の白山を展望し次第にテンションが上がった。

そしてシャクナゲ平で中出コースと合流し、登山客と山談義ができた。「もちが壁」からは階段や岩石



「トトロの木」の根元で休憩

の勾配も険しかった。前荒島を越えると最後の登りに入り祠が現れ頂上で岳友とゆっくりと休憩した。

頂上からは東に、白馬、穂高、槍までもうっすらと見える、北は日本海と富山も見える。白山は目の前だ。

帰路は岳友も足がつりそうになったが小休止し、水分、塩飴等を補給して立ち直った。足場が悪い急勾配道を足幅とスピードを調整しつつ下ると、ふくらはぎが疲労する。加えて、直射日光がきつくと汗が吹き出し、呼吸が荒くなり足腰も消耗する。

今回は平地で30℃近くあり、森林浴の時間帯もあったが、直射日光を浴びる時間と距離が長かった。

それでも何とか標準タイムで戻り、まずは駐車場の木陰で休み、車で奥山を抜けたスキー場勝山に学友の計らいで泊まることのできた。山奥に開拓したスキーリゾートであり、端境期で宿泊者も比較的少なく、道端にはキツネが飛び回っていた。

体力が消耗したため、地産の新鮮なカニ、刺身を乾杯しカツカレーで明日の白山登山に備え「充電」した。

【行程】勝原コース

- 9:17 駐車場。炎天下、眩しい舗装の坂道200m歩く。
- 9:54 登山口到着。ここから森林浴で救われる。
- 10:20 トトロの木の根元で一休み(10分)。
- 10:40 白山展望口で明日の白山展望。
- 11:22 小荒島分岐着(休憩6分)。急登で鉄鎖ロープも掴む。道が開け、熱中症に注意。
- 12:37 頂上着。神社横で日陰求め休憩。四方八方のパノラマは最高。国蝶の岐阜蝶のつがいも舞っていた。
- 13:18 頂上下り。
- 14:00 小荒島分岐。
- 14:30 トトロの木(10分休憩)。
- 15:40 登山口。灼熱の舗装道路を歩む。
- 16:20 駐車場。

白山 2702m (平成 29年 6月 18日)

往復8時間27分(休憩含む)、標高差1442m。石川県(白山市)と岐阜県(白川村)等にまたがる山岳地帯であり、三霊山の一座であり、パワースポットと言われる。参道がしっかりとしており、室堂センターにも荘厳の神社があり、荒島岳と比べ距離・時間の割に登りやすい。夏でも残雪があり、清



荒島岳頂上：北アルプス方面のパノラマ展望



白山途中の名物の黒ボコ山。奥は別山

流の宝庫であり、お花畑でハクサンの名がつく花が18種類もあると聞いた。

頂上には神社が祀られ直下には紺青の翠湖が見られる。長い整備された参道、延命水などを歩き味わうと、白山とともに北陸市民が生きていると感じる。白山は4つの水流の源を形成する。九頭竜川(流れ：岐阜⇒福井)、長良川(岐阜⇒愛知)、手取川(石川)、庄川(岐阜⇒富山)だ。水力発電の水源が豊富な。

白山の登山道は、比較的やさしい山容で信仰の山の雰囲気がある。その一方で溶岩が流れた跡も見え自然の猛威も知ることができる。

当日はジャム勝山を朝4時起き、4時45分に出発。一時間で市ノ瀬に着き登山届けを出して水分補給し朝食。別当出合の山の駐車場まで5分。そこから歩き10分で砂防新道への登山口に入った。まず大鳥居を過ぎ深い渓谷の長い吊り橋を渡り緑豊かな土の登山道へ歩を進める。20分ほどしばらく整備された登山道を歩く。

そのとき、突然、山道から10mほど離れた山側の木藪からガサガサと異音がした。不審に思い、その方向を覗くと一頭の大熊がいた。体長1.5m、体重200kgはあるまん丸と太ったツキノワグマだ。とっさにストックで身構え後ずさりした間に、熊は登山道を横切り下の砂防ダム側に勢いよく去った。冬眠から目覚め活動範囲を広げていることがわかった。以前にある会合で熊本県蒲島知事からノベルティで

いただいたまん丸としたクマモンにそっくりの体型をしていた。もちろん今回は可愛いというより、冷や汗ものだったが…。

その後、中飯場を過ぎ、残雪が出現した登山道は、しらびそ林のなかで、まるで巨大なエアコンがわりで涼しかった。天気も曇り熱中症の懸念がすっかり和らいだ。残雪歩きは雪が柔らかく助かる。白山の登山道は整備され、足にはやさしいため昨日の荒島岳に比べ疲れが残りにくかった。標高2300mが森林限界だ。

南竜小屋方面に別山を眺めたあと、分岐点からアイゼンを履き急坂を万歳岩の黒ボコ山まで駆け上がった。そして雪原の弥陀ヶ原を快走し、室堂センターに到着した。

山頂神社も山小屋も整備されていた。頂上からは、雪渓の先に室堂が見え、また直下には翠ヶ池のコバルトブルーには涼気を感じた。しかし、そこから剣ヶ峰方面は火山特有の岩がゴロゴロし絶壁もあり、氷結しており危険なため無理はやめた。火山特有の厳しい剣ヶ峰、大汝峰は残雪が深く、本格的な登山家たちも7月の縦走の時期を見極めていた。

頂上では北陸電力、中部電力等が寄贈された方位盤が目をついた。山岳協会とともに、地域との密接な絆を大切に登山や水源の安全そして豊作祈願のためであろう。

帰路は雪渓からの水脈が豊富で御前峰付近の延命水を竹コップでいただいた。そして甚之助小屋で休憩したあと、下り専用の道を回って走った。吊り橋を渡りゴールシンボルの白い鳥居が見えた。一礼二拍手二拝で登山の無事を感謝した。

【行程】

- 6：30 別当出合発（途中の山道の上藪に大熊出現）。
- 7：05 中飯場。洗面と手拭い冷やす。
- 7：44 別当硯。
- 8：23 甚之助小屋で休憩（10分）。
アイゼン装着。別山を見に南竜小屋途中



白山頂上：北陸電力㈱、中部電力㈱、石川県山岳協会ほか奉納の方位盤。平成20年8月再建



白山頂上から、残雪の室堂小屋

まで行く。

- 9：20 南竜分岐。ここから雪渓登り。
- 10：05 黒ぼこ岩。万歳写真。雪の弥陀ヶ原を快走。
- 11：00 室堂センター。カップ麺、コーラと山バツジ。
- 11：17 小屋発。
- 11：57 御前峰に「拝タッチ」。
- 12：03 発。
- 12：20 室堂センター。
- 12：43 黒ボコ岩。雪渓下り。
- 13：10 南竜分岐。
- 13：28～13：39 甚之助小屋休憩。
- 14：30 中飯場。
- 14：57 別当出合着。

登山を終えて、駐車場に行く途中、電柱が木のブラウン色にして景観への配慮を感じた。また市ノ瀬水力発電所（落差110m、流れ込み式）も道路脇から眺めた。



白山と環境調和したブラウン配電柱